

## 老と若

小樽市医師会  
城小児科クリニック

### 城 守

一昨年藤井聡太さんが、史上最年少でプロの棋士となりました。さらに、五、六、七段と瞬目の内に昇段し、私のように中学生のとき以来駒を握ったこともない者さえ、驚きと興味の目を向けさせてくれました。

公式戦の初対局は、その時まで史上最年少でプロになった加藤一二三さんです。彼は最高齢勝利、最高齢対局、現役勤続年数、通算対局数など歴代1位という最高峰の棋士でした。その加藤九段と藤井四段が対戦したときの年齢差は62歳6ヵ月もあり、すべての面で加藤九段が凌駕していると思っていましたが、藤井四段に敗れました。ふと中国の「麒麟も老いては驚馬に劣る」という成語が頭に浮かびましたが、もちろん藤井棋士は驚馬ではなく、傑出した棋界の麒麟児です。

棋界という特別な社会での勝負事ですが、知識や経験がいかに豊かであっても、加齢はそれらを十分に生かすことができない状態に陥らせることを目の当たりにした気がしました。

「医者と坊主は年寄りが良い」との諺がありますが、果たしてどうでしょう。ある年齢を越えると体力、気力、持久力のみならず、閃きや即応力も衰えてきているのを実感します。自動車の運転も、動態視力や運動反応が低下するばかりでなく、周囲の状況を即時に判断・処理する能力が減退しています。この冬には60年間握ってきたハンドルともお別れです。

「死に切って嬉しそうなる顔二つ」。川柳に初めて接した頃の句の一つです。“長患いの看病あるいは年老いた親の介護に疲れた夫婦が、ようやくそれらから解放され、悲しくともホッとした安堵の顔を思い浮かべたもの。”と勝手に解釈しました。しかし、“江戸時代は心中に失敗すると、晒し者にされた上に、遠島などの重刑に処せられたそうです。従って、無事(?)二人とも死ぬ目的が達成されて、穏やかな様子の仏様の顔を読んだ句。”とのこと。それを嬉しそうとの表現する川柳の穿ち、風刺の中にも作者の共感と思いやりの気持ちが感じられます。

この句を、誤訳、珍解するほど、高齢化が急速に進み、社会の対応が後手に回り、看病、介護の負担が若い世代のみならず、同居する熟年・老年の家族に重くのしかかっています。9月15日に厚労省は、100歳以上の高齢者が67,824名と、前年から2,132名が増加したと発表しました。この中で自立した生活

をしている人たちはどのくらいの割合なのでしょう  
か。

「高秋鬢の白きを悲しみ 衰病顔の紅きを夢む」。文豪夏目漱石の漢詩に詠まれた一節です。「秋の深まるにつけ、自分の髪の毛の白くなったのを悲しみ、病弱の身になるにつけ、あの紅顔の美少年のころを夢に見ることである。」<sup>1)</sup>との意味だそうです。漱石のような名声を欲しいままにした人でさえも、晩年は青雲の時代を顧み、老いを憂えたのでしょうか。いわんや凡夫においておや。

漢の国威が最盛の時代にあった武帝さえも、「少壯幾時ぞ老いを如何せん」と。おそってくる老いはどうしようもないと嘆いています。

‘老い’を哀れなもの、悲しいものと嘆く考えが多くみられます。それは若さの輝きが強ければ強いほど老いの陰が濃く見え、体力、気力共に衰えてゆく儂さを痛切に感じるからだと思います。若い頃は、多忙の中の休日は盛りだくさんに遊びやスポーツを組み入れ、ひと時の休みを楽しんだものですが、近年はダラダラして過ごす時間が多くなりました。

体力の衰えを気力で補い、なるべく人様に迷惑をかけないようにして過ごしてゆきたいと思っています。

1) 鎌田正 他著：漢詩名句辞典、大修館書店

